

●滑稽俳句協会報 5月号より

雛納その甲斐もなく出戻りぬ

～可知豊親

雛納めが遅いと「娘の婚期が遅れる」との俗説がある。
折角早めに雛を納めていたのに、何たることか突然娘が出戻った。
この様に「さらり」と詠むには、それ相応の力量を必要とする。
可笑しみとペーソスの配分が卓抜である。

人並となりし神童卒業す

～白井道義

神童も大人になったら只の人。
子供が幼い頃は、親の欲目で神童に見えたが、成長するに従って人並み程度になった。
よくある親の期待感。人並みでよいではないか。
神童が登場して俄然面白くなった。

万愚節院内マイク僧を呼ぶ

～中沢壮荷

医者が手放した患者には僧侶が出る番である。
この作品はブラックユーモアたっぷりである。
患者の臨終に立ち会った際、息を引き取るや否や、僧侶と葬儀の日程の打ち合わせをするのを目撃した。病院と寺院は共同企業体。万愚節がよく効いた作品である。